

1. 本園の教育保育目標

保護者の協力を得て、多くの良質な体験を通して自信を持たせ、園児個々の成長目標を達成する

- ・心情(Feeling)の豊かな子ども…「感情表出」「愛情」「他への理解」「申告意欲」「試行意欲」「連帯意欲」「正義感」
- ・態度(Manner)の良い子ども…「挨拶」「謝罪」「感謝」「懇願」「自己責任」「選択責任」「勝者の義務」
- ・自主的に行動(Behavior)できる子ども…「規律遵守」「忍耐」「勇気」「責任感」「委任追従」「自己主張」「自己顕示」
- ・個性(Identity)豊かな子ども…「演出表現」(「演技」「言語」「心情表出」)
 「絵画制作」(「興味・関心」「集中・熱中」「創造・想像」)
- ・健康(Health)な子ども…「運動・体力」(「走・跳・投」「泳・潜」「持久意欲」)

2. 今年度、重点的に取り組む目標、計画

- ・人材のアクティベーションを目指す
- ・教育・保育内容のフレッシュアップを目指す
- ・有効な予算の執行を目指す

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目(課題)		取り組み状況
①	人材のアクティベーションを目指す	キャリアアップを17名受講し、中堅職員の中には6教科をクリアすることができた。受講しやすいweb活用から学びを深められる機会を得られた効果であった。さらに、「乳幼児の靴選びと健康」「実習生を受け入れる側の注意点」など、保育技術以外の知識を深めた。
②	教育・保育内容のフレッシュアップを目指す	園内研修として、クラス公開保育を実施し、他クラスの職員に見てもらうことで教育・保育内容のフレッシュアップを図った。
③	有効な予算の執行を目指す	コロナウイルス感染症対策事業や実際に感染症が広がり休園処置対応など、予算執行の抜本的対策に苦慮している。

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

これまでのようにコロナウイルス感染症予防の影響からくる学びの場が激減した状況から、今年度はweb開催が主流となり、より安定した環境で一人でも多くの職員が学びの機会を得たことは大変よかった。感染症流行により、小学校や中学校など縦の交流の機会や行事中止を余儀なくされたこの状況下で、行事開催スタイルや園外保育において、お子さまの行動制限を最小限におさえ保育展開できたことは評価に値する。

5. 今後取り組むべき課題(次年度へむけて)

課題	具体的な取り組み方法
① 新型コロナウイルス感染症対策に変化しつつある情勢に対応する事業展開する必要がある	固定概念にとらわれ過ぎず、お子さまの最善の利益をもとめ柔軟な姿勢で教育・保育実施について、若手の意見も多く取り入れトータルコーディネートをおこなう。
② 保護者理解	園の教育・保育に関する理解を得られるように、事業計画の告示、経過説明、報告などを丁寧に行う。
③ 経営	感染症拡大による様々な影響に左右されず、お子さまの貴重な体験を優先させつつ、園児数と収支のバランスを本部や理事会、評議委員会とタイムリーに確認しながら安定を図る

6. 学校関係者の評価

令和3年度は総じてみて、前年度に続き、新型コロナウイルスの感染拡大状況に合わせた運営がより一層、求められた一年であったと言える。法人に所属する各施設は特に緊急事態宣言の発令や蔓延防止等重点措置の適応がいち早く出される地域であったことから、常に先行事例がない中で、ウイルスの変異や社会からの要請、また何より管轄する行政によって指示される内容のみならず、対応の早さの違いといった様々な変動する要因に対応して、法人本部と各施設、あるいは保育士と看護師といった様々な部門、階層での重層的で密接な連携強化が行われ、お子様の健全なる成長に寄与する保育と保護者様への就業支援という法人の存在意義を余すところなく発揮してくれたことが総括として感じられることである。

具体的にはコロナ禍の移動制限にかまけることなく、積極的にICTを利用した多くの研修や様々なミーティングを積み重ねることで人材育成に努められ、更には保育の見える化にもICTを十二分に活用されることで保護者の皆様のご理解を深める活動にも注力されていたことが印象的であった。このようなICTの活用は、今後においても発展的に活用されていく予定であるとのことなので大変期待できる。

特筆すべきは、年に一度、開催されているアワードバンケットという取り組みである。アワードバンケットは各施設、あるいは各職員が日ごろ培ってきた新しい保育方法や教材の開発にとどまらず、保護者様への対応、地域との連携、人材育成方法、経営管理といった複数のカテゴリーにおいて研究発表を各分野における外部の専門家の評価及び指導を受けるイベントであり、それを活用して各施設や各職員が持つ暗黙知を形式知化して組織全体へ切磋琢磨しながら学び、波及させていく試みは実質的なスキルの向上にとどまらず、全体的なモチベーションと専門職である保育士というプロフェッションナリズムの向上と活性化に大きく寄与していたと思われる。特に、令和3年度はICTを使い、全職員がリモートで参加できるようにしたことは前述したこの間に得られた優れたICTの活用であり、新しい試みであったと言える。

三密が忌避される中で保護者様との連絡が通常より難しくなったと言われることが多いが、全ての職員がモバイル端末を以前から常に携帯しており、それを使っての物理的な距離を超えたより一層の緊密で濃密な連絡や報告、相談が日々、行われていたことに大変感心した。その他、高評価を頂いているビュッフェや基準以上の職員配置など特色ある運営は変わらず行われており、変化は無かったことにも安心させられた。

ただ、ICT化への先行投資や新型コロナウイルス感染拡大への対応のための出費などの必要なことではあったが、決算予測としてやや厳しい状況にあることが報告されており、そのことが今後の注意すべき大切な課題であると考えている。

次年度以降も、予算の適切な執行に基づいた保育と就業支援の理想的展開を心掛けていかれることを理事会及び評議会としては連携して管理監督していくつもりである。

令和4年3月23日 理事会